

布施の心

7

本多 克也
(講學も)

文・徳永 耕一

【大学入学】

仕事は、駒場の東大宇宙研究所のデータ計測係だったが、夜のアルバイトなので収入は少なく、食べるのもままならなかつた。

母からは、時々石鹼などの日用品と一緒に田舎の食べ物が送られてきて、それで数日を食いつないだ。荷物の中に必ず手紙が添えられていて、私にとつてはそれが唯一の慰めと励ました。夜、ひと息つくと何度も読み返した。長崎ではこの年（昭和三二年）、諫早大水害が起き、母からの報告で驚くとともに、友人たちを案じた。

生活は苦しかったが、大学進学の思いは捨てきれず、仕事を合間に自分に合う大学を探した。希望の専攻科目はやはりあくまでも化学だった。その日暮しの生活の中でも、心のどこかに中野先生の「本多君は化学ができるな」という言葉が残っていたのだ。

そんなある日、中央大学が目にとまつた。待望の化学専門の科があり、学費も安い。

「これをしては、自分が浮かばれる道はない」

そんな悲壮な思いで、必死に受験勉強に励んだ。その甲斐があつて、一九五八年四月、無事中央大学工学部工業化学科に合格した。二十一歳のときだ。

当時中央大学は、本部や法律関係などの文化系がお茶の水にあり、私が通う理工系は水道橋にあった。新調した学生服を着て臨んだ入学式では、周りよりもやや年のいった一年生で、恥ずかしかつたが、「これで自分もやつと社会のレールに乗ることができた」と胸を膨らませた。



コロッケのイメージ

2023年3月本多産業株式会社は
設立50周年を迎えます。

 **本多産業株式会社**

【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814
TEL:045-869-1133
【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677
TEL:0957-38-3520

憧れの大学は最初は楽しかつた。キャンパスに吹く風は心地よく、自分にはこれから明るい将来が待つているような気がした。

しかし、厳しい経済状態は、まもなくそんな甘い夢を打ち砕いた。

東大宇宙研究所の夜間アルバイトではどんなに節約しても収入が足りず、食費と学費を稼ぐためにやむを得ずやめて、手当たり次第に短期アルバイトをしながら食いつないだ。そして、夏休みには、長期アルバイトにもはまつた。最も稼ぎがよいバイトは土方で、一日の日当が一百五十円だった。その頃、銭湯が十円、ラーメンが三十円の時代だ。JR中央線高尾駅近くで大型工事が行われており、その工事の飯場に住み込みで入ったときには、二ヶ月近くどこへも遊びに出ず、もらつた給料を全部、学費や生活費のために貯め込んだ。

飯場の人たちとはすっかり馴染になり、よくおごつてもらつたり、励まされた。

「学生さん、将来日本を背負つて立つのだから、頑張つてくれよ」

彼らは一見強面で粗雑なようだが、懐に入つていくと実に人情が厚く、気遣いもしてくれた。

人情と言えば、その頃下宿への帰り道の商店街で、惣菜屋さんからよく、「おい、学生さん。コロッケ食べなよ」と声をかけてもらつた。私の風采が見るからにしょぼく、貧乏学生丸出しだったからだろう。そのコロッケの味は未だに忘れない。

私は、この時期、彼らの人情に助けられ、励まされた。そしてまた、母の言葉が浮かんできた。

「人様にはよせんばよ」